

ツマベニチョウだより 第 28 号

蝶の館の「ツマベニチョウ祭り」が賑わいました

宮崎市最南端の内海・大園地区のオーシャンヒルオートキャンプ場（服部富太郎社長）が亜熱帯植物用の温室を「蝶の館」にされたことは前号でお知らせしましたが、そこで9月6日から15日までの10日間「ツマベニチョウ祭り」を開催されました。期間中は毎日100頭前後の蝶が広々とした温室内を飛び交い、吸蜜や交尾行動や産卵を繰り返して幼虫も生まれました。それが評判になって宮崎市内はもとより県内各地から見学者が相次いで延べ650人にもなったそうです。

ツマベニチョウがオートキャンプ場に度々産卵しました。

前号でも延べましたが大園地区のオーシャンヒルキャンプ場にツマベニチョウが飛んで来てあちこちのギョボクにたくさんの卵を産み、幼虫が1本の木に10頭もついているのが確認されました。また私が訪問した際にはいつも成蝶の雄、雌を見かけましたので確実に生活圏を広げつつあると思いました。

蝶の館のツマベニチョウがNHKテレビで放送されました

オーシャンヒルの「ツマベニチョウ祭り」が評判になったことからマスコミに取り上げられ、地元の新聞だけでなくテレビでも大きく報道されました。NHKでは宮崎放送局の川野茜アナウンサーが「蝶の館」を訪れて、オーシャンヒルの総支配人の河本睦子さんと対談され、日南海岸におけるツマベニチョウの現状や今後の展望などについて話されました。河本さんは「日南海岸をツマベニチョウロードに」との夢を熱っぽく語られました。

放送は9月17日の午後6時半から5分間ほどでしたが、行政ご当局や観光関係者などにも大きな波紋が広がったようです。

環境問題の一環としてNHKテレビから取材されました

前述の「蝶の館」でのテレビ取材に引き続き、私が食樹のギョボクを植えて日南海岸にツマベニチョウの増殖誘引をはかって来たことについてNHK宮崎放送局の江崎大輔記者から取材され、10月27日の午後6時20分から4分半ほど放送されました。

内容はツマベニチョウの増殖に努めて来たことや、「蝶の館」内を飛び交うツマベニチョウを観察する子どもたちを写しつつ、私の願いなどにも触れていただきました。そしてツマベニチョウの生存などに悪影響を及ぼさないように、温室内で育てた蝶は絶対室外に放たないようお願いしていることなども語って下さいました。

この放送は前後して九州全域に放送されたそうで、県外の知人からも電話がかかってきました。

室屋瀧雄様が日南海岸の2箇所にギョボクを寄贈して下さいました

ツマベニチョウの相次ぐ発生で餌不足に陥っていたオーシャンヒルと猪崎鼻の飼育用にと、6月以後2回にわたり室屋瀧雄様が郷里の山川町から運んで来て240本(オーシャンヒルに184本、猪崎鼻に66本)のギョボクをそれぞれ寄贈されました。

どちらもよいタイミングで助けていただいたと感謝しておられました。

本年はたくさんのギョボクや花木を植栽することが出来ました

今年中に植栽または寄贈したギョボクやランタナ等の花木は下記のとおりです。

植 栽 先	(ギョボク)	(ランタナ等)	植 栽 先	(ギョボク)	(ランタナ等)
オーシャンヒル	228本	473本	城山公園再開発会	100本	
フェニックスドライブイン	15本		鵜戸中学校	10本	20本
潮 小 学 校	8本	7本	サンメッセ日南		77本
合 計	(ギョボク)	361本	(ランタナ等)		577本

ちなみに昨年までの5年間に植栽、寄贈したギョボクは814本、花木は1539本でしたので総合計するとギョボクは1175本、花木は2116本となりました。

日南海岸各地のツマベニチョウの現状と課題

今年は最北端の宮崎市内海・大園地区のオートキャンプ場にギョボクを植えていただいて以来、まるで待っていたかのようにツマベニチョウがやって来て産卵や生育を始めました。またそこから南へ順にたどっていくと潮小、大海ドライブイン、鵜戸中、サンメッセ日南、猪崎鼻、南郷の亜熱帯作物支場の各個所とも順調にツマベニチョウの生育、羽化が見られました。

そして12月中旬の現在では温室や飼育舎だけでなく野外でも相当数の越冬蛹が確認されています。また幼虫も育っていて来年の4月下旬にはツマベニチョウが飛んでくれるものと思われまます。

そこで課題となったのが「幼虫の過密をどうするか」ということです。ギョボクが相当大きくて10頭以上でも食べ尽くさないだけの葉っぱがあればよいのですが、移植して1~2年の苗では数頭の幼虫でも食べ尽くし、ギョボクがみるみる裸にされて全部の幼虫が共倒れになってしまいました。このことは亜熱帯作物支場でも伺いましたが、特にオーシャンヒルキャンプ場や猪崎鼻で顕著でした。その対策として当分の間1本のギョボクには2、3頭の幼虫をつけるにとどめておき、余りは他のギョボクに移してやる必要がある、それでも幼虫が多い場合には適宜間引くことも考えなければならないと思いました。

それは兎も角、今年はツマベニチョウにとって生活圏を広げる画期的な年であったことを報告しまして本号を終わります。

平成15年12月15日

海老原 秀夫